

精進無涯（人は何を求めて・・・）

11月は、「士（さむらい）」の月である。したがって、11月の初めにちなんで、その「士」に係る話を上田元将補の講話に見つけたので紹介する。これは「士」すなわち「自衛官」という連携であるが、諸兄は技術者として「学士」「修士」「博士」など、やはり「士」の部類でもある。従って本稿を自らの「士」に照らして読んでもらいたい。（以下引用）

「少年よ大志を抱け」とは、明治、札幌農学校に招聘されたクラーク博士が生徒に示した有名な言葉である。

「志」とは「士」、つまり仕えて事をなす者が持つべき「こころざし」を示すものであり、単なる思いつき、考えを示すものではない。「志」は、身を修め、世のため人のため強い意志を継続して堅持し、事をやり遂げていく「こころざし」なのである。

自衛官は、その任務から他の職業に比し、任務遂行に必要な知識技能という知力、いかなる状況下、水火の中においても動揺することなく、理性ある服従と部下統率の出来る精神基盤と人格からなる徳力、連綿と過酷な条件下で任務を遂行しうる体力を、より高く維持し、向上することに努めなければならない。そしてその心構えは「月月火水木金金」であらねばならない。

柳生家の教えに、『つまらない人間は、縁があってもその縁に気付かない。普通の人間は、縁に気付いてもその縁を活かしきれない。求める心の厚い人、志の高い人は、袖ふれあう縁をも生かす。』というのがある。人間、特に「士」には求める心、志の高いことが必要である。

その道に精進した結果、人々から敬意を受ける天然の位（くらい）を「天爵（てんしゃく）」といい、努力の過程において得られた人間社会の位、すなわち世俗的な序列を「人爵（じんしゃく）」という。自衛官の階級は明らかに「人爵」に属する。

孟子は次のように述べている。『昔の人はそうでなかったが、今の人はその「天爵」を修めて以て「人爵」を求め、いったん「人爵」を得れば、やすやすとその「天爵」を棄つ。惑えること甚だしき者なり。そういう人は、ついには、また必ず「人爵」まで失わん。』と、このように嘆いている。

我々「士」は、常に真の自衛官（限りなく「天爵」）を求めて、志を堅くして精進する必要がある。精進無涯とはこのことである

現在、人々の価値観が多様化したとよくいわれる。確かに日本人の文化、精神、価値観は幅広く変化したのかもしれない。しかし、人間は各々自己の人生を持っている。自己の人生の価値は、当然他人の評価（客観的評価）を受けて初めて認められるものであろうが、ここで自分自身による評価（主観的評価）を軽視してはならない。なぜならば、自分自身が評価できる人生でないかぎり真の満足はなく、仮製の人生として終わるからである。

「人爵」という仮の位置に安座し、または保身に陥ることなく、天職を遂げる「天爵」を求めて努力しようではないか。

人生に完全さはない。ふとした失敗、失意もあるであろうが「天爵」を求めるベクトルを失わず努力することが人生の真の勝者なのである。（以上引用終わり）

（開発官付言）

これも一つの意識・認識改革であり、自分の人生や職務について「天爵」「人爵」というカテゴリーで分けて考え、そして上へ上へとベクトルを向けて、努力することなのである。各位の「士」としての奮戦に期待する。

以上